

日本の新聞記事における細川俊夫の評価の変遷

栢 菅 有 香

1. 序

広島県出身の作曲家である細川俊夫（1955～）は、1978～82年にベルリン芸術大学で尹伊桑（1917～95）に、1983～86年にフライブルク音楽大学でクラウス・フーバー Klaus Huber（1929～2017）に作曲を師事した後、日本とドイツを中心に活動を行っている。ドイツの前衛音楽の語法を用いて、日本の美学の世界を表現する作風で知られているが、近年、その作品がザルツブルク音楽祭¹⁾や、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団²⁾などから委嘱を受け続けていることから、細川が作曲家として不動の地位を築いていることは言うまでもないだろう。その他に、秋吉台国際20世紀音楽セミナー&フェスティバルの音楽監督（1990～98、以下、秋吉台）や、ベルリン高等研究所（2006～2011シーズン）のフェローを務めるなど、その精力的な活動には、目を見張るものがある。

近年、このような細川の創作活動を包括的に捉えた文献が海外で出版されている。たとえば、尹の研究者であるドイツ人のヴァルター＝ヴォルフガング・シュパーラー Walter-Wolfgang Sparrer（1953～）と細川との対談集『*Stille und Klang, Schatten und Licht — Gespräche mit Walter-Wolfgang Sparrer*』（2012 Hofheim: Wolke Verlag）、さらに日本の作曲家の研究者であるイタリア人のルチアーナ・ガリアーノ Luciana Galliano（1953～）による『*Lotus—La Musica di Toshio Hosokawa*』³⁾（2013 Milano: Auditorium Edizioni）などが挙げられるだろう。シュパーラーの文献は、細川の音楽監督等の活動を含めて、創作キーワードごとに対談がまとめられ、その他に年譜、作品目録、ディスコグラフィが収められている。そしてガリアーノの文献には、シュパーラーや建築家の磯崎新（1931～）などによる論文（第1部）、すでに他の文献に掲載された細川との対談を伊語に翻訳したもの（第2部）、すでに他の文献に掲載された細川のエッセイや講演を伊語に翻訳したもの（第3部）、年譜

-
- 1) ザルツブルク音楽祭からの委嘱は、2作品ある。最初の作品は、オーケストラのための《循環する海》（2005）。2005年8月20日に同音楽祭でワレリー・ゲルギエフ（指揮）、ウィーン・フィルハーモニー管弦楽団によって世界初演された。2作品目は、ソプラノとオーケストラのための《嘆き》（2013）。2013年8月25日に同音楽祭でアンナ・プロハスカ（ソプラノ）、シャルル・デュトワ（指揮）、NHK交響楽団によって世界初演された。
 - 2) 《ホルン協奏曲「開花の時」》（2010）。2011年2月10日にベルリンでシュテファン・ドール（ホルン）、サイモン・ラトル（指揮）、同楽団によって世界初演された。
 - 3) 『蓮——細川俊夫の音楽』。

が収められている。

一方、日本でも、包括的な文献が全くないわけではないが、しかしながら、前述したシュパーラーの文献の訳本のみである。この訳本は、細川の友人であり、哲学を専門とする柿木伸之⁴⁾ (1970～) による翻訳で『細川俊夫音楽を語る——静寂と音響、影と光』(2016 東京：アルテスパブリッシング) として出版された。この文献以外には、初期から現在にいたるまでの細川作品における変遷を包括的に論じた論文はまだない。しかしながら、細川作品が委嘱初演される際や、細川が音楽監督を務める音楽祭が行われる際には、細川に取材されるほか、初演作品ないしは音楽祭の批評や開催内容の報告が新聞や雑誌に記事として掲載される。そのため、細川の活動がほとんどリアルタイムに記録された新聞や雑誌記事は、細川の全体像を把握するための貴重な情報となる。

そこで本論文では、全国新聞のうち、発行部数の多い『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の3大新聞および、音楽・舞踊・演劇・映像の総合専門紙である『週刊オンステージ新聞』⁵⁾ に掲載された細川に関する記事を対象に、細川の創作活動がどのように論じられているのかを明らかにすることを目的とする。尚、本論文は、筆者の博士論文『細川俊夫の創作、活動と批評——日本とドイツからの考察——』の「第5章 細川をめぐる評価 (日本)」に基づくものである。

2. 対象と方法

新聞記事の収集および分析を行うにあたり、白石の論文 (2014) を参考にした。そして、この論文では、以下のことを目的としている。

1960年代の日本における「ケージ現象⁶⁾」の解明のために、その基礎作業として、『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』に掲載された署名または無署名の記者や評論家による記事の目録を提示することを目的とする (白石 2014: 17)。

白石の論文は、対象としている作曲家が、いかに一般に認知され、その作曲家の音楽がどのように論じられる傾向にあるのか、その過程を明らかにする目的に有効な方法の一つと言えるだろう。白石論文における記事は、何を対象とするかによって次の3つに分類できると考えられる：①記事

4) 現在、広島市立大学国際学部准教授。

5) 発行人はバレエ評論家の谷孝子であり、株式会社オン★ステージ新聞社が編集と発行をしている。1970年10月15日に創刊され、1971年1月6日に週刊化された。記事は、現代音楽を専門とする音楽学者の白石美雪 (1958～) や長木誠司 (1958～) などが執筆している。

6) 「ジョン・ケージの作品は様々な人びとに開かれたものであることを特徴としている。それは《4分33秒》からミュージサーカスにいたるまでの、偶然性・不確定性の作品群において典型的に現れた彼の作曲技法であるだけでなく、彼の楽曲と著作そのものを超えて、演奏者や聴衆を巻き込んだ「ケージ現象」とよぶべき音と文字の世界を構成している。これはあらゆる音楽に共通して言えることなのだが、この開かれたプロセスを組み込んでいることがここで『ケージ現象』とよぶ由縁である。」(白石 2014: 17)

の件数、本数（以下、データ分析）、②何を対象とする記事なのか（作曲家論、作品論、作曲以外の企画等の活動、以下、記事の分類分析）、③記事の内容（とりわけ評価に関わる記述、以下、記事分析）に分類できると考えられる。①データ分析では、各年に記事が何件あり、その中で件数が多い年の理由が示され、②記事の分類分析では、演奏会批評や演奏会の告知など、どのような性質の記事が何件あるのかが提示される。そして最後の③記事分析では、ケージやその音楽がどのような言葉で紹介されているのかを、項目を分けて考察されている（白石 2014: 19）。博士論文では、白石の方法を踏襲し、前述した3つの観点から分析を行ったが、本論文では、①データ分析と③記事分析の一部を示すにとどめる。

記事の収集方法は、次の通りである。3大新聞は、データベース化されているため、下記のURLにアクセスし、キーワード欄に「細川俊夫」と入力し検索を行った。データベースで本文を見ることができなかった記事は、縮刷版、さらに縮刷版が見られなかったものは、国立国会図書館所蔵のマイクロフィルムを参照した。

尚、今回は、第三者が細川の創作活動をどのように論じているのかを見るため、細川が執筆した記事は除外した。

朝日新聞：聞蔵Ⅱビジュアル（URL: <https://database.asahi.com/library2/login/login.php>）

結果：229 件、細川に関する記事：218 件（細川が執筆した6件の記事は除く）

毎日新聞：毎索（URL: https://dbs.g-search.or.jp/WMAI/WMAI_ipcu_login.html）

結果：126 件、細川に関する記事：117 件

読売新聞：ヨミダス歴史館（URL: <https://database.yomiuri.co.jp/rekishikan/>）

昭和（1933～1985 年）——結果：63 件、細川に関する記事：2 件

平成（1986～2014 年）——結果：209 件、細川に関する記事：198 件

（細川が執筆した記事8件は除く）

一方、『週刊オンステージ新聞』は、データベース化されていないため、武蔵野音楽大学図書館と国立国会図書館で参照した。そして、細川の処女作《ウィンター・バード》が作曲され、初演された1978年から2015年までの記事すべてに目を通し、本文中に「細川俊夫」ないしは「細川」の名前がある記事を手作業で収集した。たとえば、細川が音楽監督をしていた秋吉台に関する記事であっても、本文中に「細川俊夫」および「細川」の名前がないものは除外した。その結果、258件の記事が確認できた。

ここで、細川に関する新聞記事の分析を行う意義をあげておきたい。いつ頃から日本を代表する作曲家としての像が作り上げられ、いつ頃から認められるようになったのかを考察する際に、新聞

という媒体は、その変遷を明らかにすることができるということである。今回は一般紙の中でも3大新聞を取り上げたが、発行部数の多い3大新聞は、人々の目にする機会が多いため、手始めとして全体的な傾向を把握するのに適している。

では、細川自身は、新聞批評をどのように捉えているのだろうか。細川が自作を語るさいに用いる「母胎空間」に関する細川の言説の中で、細川は以下のように述べている。

一九八三年に発表したオーケストラ曲「否の空間」以降、私はこの濃密な意味と方向性をもつ「間」を問題にした作品群を発表してきた。しかし、私の用語のあいまいさも手伝って「沈黙の美学」といったあいまいなレッテルを評論家の方々にはられてしまった。私が考えていた「沈黙」が、意味の喪失した空間（R. バルト）ではなく、濃密な意味をもつ場所（トボス）としての耳に聴こえない空間であったことに気付いたのは、中村雄二郎氏のいくつかの著作に出会ったからだ。私はそれ以来、「沈黙」という言葉を使わずに「母胎空間」と私の考えていた空間を名付けるようになった（細川 1990: 171-172）。

上記の細川の発言から、細川の意に反した批評がなされたことが契機となり、「母胎空間」という言葉に行きついたことがわかる。また、細川は次のようにも述べている。2016年3月26日に中央大学後楽園キャンパス 6210 室で、柿木伸之、佐藤美晴、細川俊夫、森岡美穂によって行われた公開シンポジウム「ドイツでオペラをつくるということ——ハンプルク歌劇場での細川俊夫《海、静かな海》初演を振り返る」で、細川は「私の音楽もヨーロッパで認められて、逆輸入の形で日本に入ってきて、上演される機会も増えてきた」ということを語っている。ここでは、「私の音楽もヨーロッパで認められて」とだけ述べているため、なぜ細川自身がヨーロッパで認められていると感じているのかは、不明である。しかし、おそらくはヨーロッパにおける委嘱や音楽祭で取り上げられることなどの他に、新聞批評もあげられるだろう。

博士論文の第1章で行った、細川作品の変遷に基づく4期の年代区分（初期～1980年代前半、1980年代後半～1990年代前半、1990年代後半、2000年代～2015年）に沿って記事分析を行った。

3. 新聞記事の分析

3-1. 初期～1980年代前半

前述したように、この頃の細川は、ドイツで作曲を学んでいた。合計17件、1年ごとの件数も一桁台、と少ないのは、この時期の細川が、ドイツで作曲を学んでいたことと、話題になる作品も多くなかったことが、その要因であると考えられる【表1】。

細川は、どのようにして、新聞デビューしたのであろうか。細川の名前が初めて掲載された記事は、1979年3月23日付の『週刊オンステージ新聞』に掲載された無署名による「アコーディオ

【表 1：1980 年代前半までの新聞社別の記事件数】

| 年 | 朝日 | 毎日 | 読売 | オンステージ | 4 社の合計 |
|------|----|----|----|--------|--------|
| 1979 | | | 1 | 1 | 2 |
| 1980 | 1 | | 1 | | 2 |
| 1981 | | | | 5 | 5 |
| 1982 | 1 | 1 | | 3 | 5 |
| 1983 | | | | 2 | 2 |
| 1984 | 1 | | | | 1 |
| 合計 | 3 | 1 | 2 | 11 | 17 |

【表作成：栢萱】

ン一五〇年祭 期待の新人 御喜美江デビュー」というタイトルのものである。内容は、1979 年 4 月 7 日に開かれた原田力男プライベート・コンサートに、アコーディオン奏者の御喜美江が出演して、細川作品を初演するというものであった。作品名は記されていない。一般紙に初めて名前が掲載されたのは、同年 4 月 21 日付の『読売新聞』に掲載された秋山邦晴による「現代音楽の状況

沈滞気味の無風状態を脱皮 聴衆との生きた結びつきを」という記事である。同年の 1 月下旬から 3 月下旬に開催された日本現代音楽協会による「現代の音楽展 '79」の第 5 夜の演奏会で、細川の処女作であるヴァイオリンのための《ウィンター・バード》(1978) が演奏されたという報告であった。尚、演奏者や日付等は記されていなかったため不明である。この作品が、1978 年 6 月 17 日にリュウベックで辰巳明子によって世界初演されたことに鑑みると、細川がドイツでデビューした翌年には、すでに日本で細川の作品が紹介されたことになる。しかし、まだこの頃は、どちらも演奏会の告知で細川の名前が記されてあったにすぎない。

細川の名前が初めて記事の見出しに現れたのは、翌年の 1980 年である。『朝日新聞』の夕刊 9 面に掲載された「細川俊夫の曲 ローマで一位 音楽賞（コンクール・コンテスト）」という記事で、12 月 15 日付の無署名のものである。タイトル通り、ローマで行われた第 3 回バレンチーノ・ブッチ国際作曲コンクールで、能に示唆を得て作曲した《フルート、ヴァイオリン、ヴィオラ、チェロのための音楽・序破急》⁷⁾ が第 1 位を受賞したという内容である。この他に海外のコンクールの情報としては、1982 年 12 月 5 日に行われたベルリン・フィルハーモニー管弦楽団創立 100 周年記念の作曲コンクールで細川初のオーケストラ作品《プレリューディオ》が第 1 位を受賞したことが 3 件⁸⁾

7) 1981 年に作曲された作品で、現在はタイトルの「序破急」は削除されている。

8) 無署名 1982「日本人青年が 1 位（ベルリン・フィル創立百周年記念作曲コンクール）」『朝日新聞』1982 年 12 月 6 日 夕刊：14。

無署名 1982「ベルリン・フィル作曲コンクールで細川俊夫さんが 1 位に」『毎日新聞』1982 年 12 月 7 日 朝刊：18。

無署名 1983「ベルリン・フィルに新作委嘱される 一時帰国中の若手作曲家細川俊夫にきく」『週刊オンステージ新聞』1983 年 4 月 29 日 第 599 号：1。

の記事で取り上げられている。ここから、細川のドイツでの活動は、ある程度は日本に伝えられていたと考えられるだろう。

初の演奏会批評は、塚田れい子によるもので、1981年4月17日付の『週刊オンステージ新聞』に掲載された「ベルリン芸大 弦楽四重奏団 エネルギッシュな演奏」というタイトルの記事である。内容は、同年4月3日に上野の石橋メモリアルホールで行われたベルリン芸術大学弦楽四重奏団の初来日の演奏会で、ドビュッシーやベートーヴェンの作品と共に、細川がこの演奏会のために作曲した弦楽四重奏曲第2番《原像》(1980)が演奏されたというものである。塚田は、細川のこの作品を次のように述べている。

作者によれば、序破急のフォルムが作品全体の構造に浸透しているということで、基本的にはひとつのフレーズをそれぞれの楽器が引き継いでゆく形をもっている。高音域の割合が非常に多く、それが作品の緊張度を高める要素にもなっているようだ。響きとしてはさほど新鮮なものではないが、アイデアが明確で、構成力もしっかりしている。だが、この若い作曲家がなぜこんなに息苦しい世界に閉じこもってしまうのか、できあがった精神世界をもってしまうのか(彼は、人の魂の奥底には、たとえようもなく美しく尊い音の海とでもいうべき原像世界、アイデアの世界が広がっていると信じている、と書いている。)筆者には疑問が残った。この疑問は、彼が今後作曲を続け作品を生み出してゆく中で解かれてゆくだろう(塚田 1981: 1)。

響きを除いて、《原像》の作品の音楽面に関しては、評価されていたが、しかしながら、おそらくプログラムに掲載されていたであろうプログラム・ノートや、細川の哲学に関しては、自己にこもり、ストイックな面に疑問が抱かれていた。

3-2. 1980年代後半～1990年代前半

前述したように、細川は1986年までフライブルク音楽大学で作曲を学んだ。そしてその後は、ドイツと日本を中心に活動するようになる。1989年から秋吉台でセミナー & フェスティバルを毎年開催するほか、1990年からはダルムシュタット国際現代音楽夏期講習会の講師を務めるようになるなど、この頃の細川は、作曲のほか、企画した現代音楽祭やセミナーで、音楽監督を務めたり、日本にはほとんど情報が入って来なかった作曲家とその作品を紹介したり、若手作曲家を育成する目的でコンクールを開設するなど、総合力を備えた作曲家としての実績を積みつつあった。

記事を収集した結果、合計148件の記事が確認できた【表2】。前期では17件だったことを考えると、148件という件数は、爆発的に増えたことを物語っているだろう。また、これまで一般紙は1年に1件のみであったのに対して、1987年以降は『週刊オンステージ新聞』と同じかそれ以上の件数になる。作曲だけではなく、音楽祭やセミナーの音楽監督等の仕事が増えることによって、細

川の名前に触れる記事の数が増えることになる。さらに、細川作品の様式的な特徴にまで踏み込んだ記事が書かれるようになることで、その作品イメージと結びつけて細川の名前が広く知られるようになったと考えられるだろう。

【表2：1980年代後半から1990年代前半までの新聞社別の記事件数】

| 年 | 朝日 | 毎日 | 読売 | オンステージ | 4社の合計 |
|------|----|----|----|--------|-------|
| 1985 | 1 | | | 4 | 5 |
| 1986 | 1 | | | 3 | 4 |
| 1987 | | | 6 | 2 | 8 |
| 1988 | 4 | | 7 | 4 | 15 |
| 1989 | 11 | | 11 | 4 | 26 |
| 1990 | 8 | | 10 | 4 | 22 |
| 1991 | 4 | 1 | 3 | 6 | 14 |
| 1992 | 4 | | 2 | 3 | 9 |
| 1993 | 6 | 2 | 5 | 5 | 18 |
| 1994 | 3 | 6 | 7 | 11 | 27 |
| 合計 | 42 | 9 | 51 | 46 | 148 |

【表作成：栢菅】

この時期、特筆すべきは、細川を特集する記事が掲載されたことである。本項では、1988年2月26日付の『週刊オンステージ新聞』に掲載された石田一志による「『母胎空間』の展開～細川俊夫～創作界のニュー・ウェーブ(33)」という記事を見てみたい。

細川俊夫が、「母胎空間」という言葉を使い出したのは、確か、八四年のフルート・ソロのための「線」の頃からではなかったかと思う。

(中略) 細川は、デビュー曲のヴァイオリン・ソロのための「Winter bird」(七八)以来、強靱で執拗に緊張感の持続する音楽を書き続けてきた。しかし、沈黙をテーマにした無音で始まり無音で終わる、八十三年のオーケストラ曲「否の空間」を代表に、一時期、音の息づきをふさぎ、窒息させるような緊張の方向に進んでいるように思えるところもあった。

勿論、作者の言葉によれば「否の空間」は「発せられた結果としての響きではなく、響以前の問題、発音行為の意味と、人と音のかかわりを問い直すこと」に意図があったというから、「響以前」の「母胎空間」を問題にしているとも考えられない。しかし、同じ「空間」といっても、それが「響」に対して「否」のイメージを先行させるか、「母胎」という満ち満ちたエネルギーをそこに想起するのか、とでは単なる形容詞のちがいはとどまらない。

「否の空間」を「母胎空間」と呼びかえた時点から、細川の音楽は、私には大変魅力的なものとなった（石田 1988: 3）。

石田の「一時期、音の息づきをふさぎ、窒息させるような緊張の方向に進んでいるように思えるところもあった」という一文は、本論文の3-1で引用した塚田の批評の「この若い作曲家がなぜこんなに息苦しい世界に閉じこもってしまうのか、できあがった精神世界をもってしまうのか」という一文と関連していると思われる。おそらく、細川の初期作品は、石田や塚田が語るような印象を与えたのであろう。また、1980年代後半ごろ「母胎空間」という言葉を細川が用いるようになってから、細川の作風が変化したことも指摘されている。

3-3. 1990年代後半

この時期の細川は、自身の初のエッセイ『魂のランドスケープ』（1997 東京：岩波書店）の出版、サントリーホールでの個展の開催（1997年10月6日）、そして自身の初のオペラ《リアの物語》⁹⁾の世界初演（1998年4月19日）など、精力的に活動を行う。そのため記事件数もさらに増え、5年間で前期と同様の148件が確認できた【表3】。4社の合計件数を見てみると、前期は20件台であったのに対して、30件台にまで増えている。とりわけ1997年と1998年がそれぞれ36件にもなった要因としては、前述した個展の開催（1997、記事件数6件）や、秋吉台（1998、記事件数7件）などが挙げられるだろう。前述したように秋吉台は1989年から始まり、細川も第1回は招待作曲家として、そして第2回以降は音楽監督として携わってきた。そのため、これまでに各年で数件は確認できるが、1998年のみ件数が増えたのは、秋吉台がこの年で幕を閉じたことに起因しているだろう。

【表3：1990年代後半における新聞社別の記事件数】

| 年 | 朝日 | 毎日 | 読売 | オンステージ | 4社の合計 |
|------|----|----|----|--------|-------|
| 1995 | 7 | 4 | 4 | 6 | 21 |
| 1996 | 5 | 9 | 5 | 7 | 26 |
| 1997 | 9 | 6 | 9 | 12 | 36 |
| 1998 | 14 | 6 | 6 | 10 | 36 |
| 1999 | 9 | 7 | 10 | 3 | 29 |
| 合計 | 44 | 32 | 34 | 38 | 148 |

【表作成：栢菅】

9) 2幕で歌詞は英語。ミュンヘン市が「ミュンヘン・ビエンナーレ1998」のために委嘱をし、同音楽祭で世界初演された。

この時期、細川の作曲技法に踏み込んだ批評や、『リアの物語』の演奏会批評などが掲載されたが、中でも注目すべきは、細川のことを「ポスト武満徹」の一人と見なした記事が掲載されたことだろう。その記事とは、1997年12月15日付の『読売新聞』で、佐々木三重子による「〔97回顧・クラシック〕オペラに好企画、歌唱力も向上」というものである。佐々木は、細川について、次のように記している。

日本人では、スケールが大きく統率力のある指揮を見せた秋山和慶氏、音色豊かで手堅い指揮ぶりで注目された大野和士氏、「ポスト武満徹」の一人といわれる作曲家・細川俊夫氏——。彼らこそ、これからの日本クラシック界をけん引する力となり得ることを実感した（佐々木1997: 6）。

この記事は、記事のタイトル「97回顧・クラシック」で示されているように、1997年に音楽界で起こった出来事や、優れた演奏会について言及したものである。この記事から、日本のクラシック界のリーダーとして見なしているため、細川のことを「『ポスト武満徹』の一人」と捉えたことがわかる。前述したように、細川は1997年に、初のエッセイ『魂のランドスケープ』の出版、個展の開催、初のオペラ『リアの物語』の世界初演などの活動を行った。このような活動の集大成が、1997年の決定的な評価へとつながったのだろう。

なお、本論文の対象ではないが、ドイツの新聞においても、細川に対する同様の見方がなされているため、ここで紹介したい。1997年3月13日付の『ベルリナー・ツァイトゥング *Berliner Zeitung*』に、ベルリン・ビエンナーレで行われた細川のポートレート・コンサートに関する批評「Biennale: Porträt-Konzert mit Toshio Hosokawa: Summt leise in die Flöte」が、トマス・シェーファー Thomas Schäfer（1967～）によって書かれている。記事によれば、この音楽祭からの委嘱作品であるバス・フルートのための《息の歌》（1997）、ヴァイオリン、チェロ、ピアノのための《メモリー——尹伊桑のための追憶に》（1996）が演奏されたようである。

最も名声を得た日本の作曲家の1人である武満徹は、彼の芸術は二つの外見上相いれない世界の結合によって、その特別な緊張状態を受け取る、ということのかつて述べていた：彼は、日本人として伝統を維持し、「西欧主義者」として革新を取り上げ、融合する。1955年に広島で生まれた細川俊夫も、彼の場合にはアクセントの位置がいくらか移動してはいるが、このような仲介に従事する：彼は、しばらくの間、とても集中的に西洋の前衛に取り組んでいたので、彼は彼自身の根源について忘れていたのだろう¹⁰⁾（栢萱訳）。

10) <http://www.berliner-zeitung.de/biennale--portraet-konzert-mit-toshio-hosokawa-summt-leise-in-die-floete-16425368>。（2018年2月25日閲覧）

上記では、2つの世界を結合した点で、細川のことを武満の継承者と捉えている。

3-4. 2000年代～2015年

この時期の細川は、器楽作品のみならず、引き続きオペラやモノドラマなどにも積極的に取り組みながらも、2003年から武生国際音楽祭で音楽監督を務めるほか、東京音楽大学（2004年度～）およびエリザベト音楽大学客員教授（2010年度～）、国立音楽大学招聘教授（2013年度～）として後進育成にも引き続き力を入れる。そして、細川のこのような創作活動が認められ、第50回尾高賞（2002）、第39回サントリー音楽賞（2007）、第58回芸術選奨文部科学大臣賞（2007）などが与えられるが、このような賞の授与が記事件数の増加へと結びつく。

【表4：2000年から2015年までの新聞社別の記事件数】

| 年 | 朝日 | 毎日 | 読売 | オンステージ | 4社の合計 |
|------|-----|----|-----|--------|-------|
| 2000 | 14 | 6 | 5 | 4 | 29 |
| 2001 | 9 | 2 | 7 | 2 | 20 |
| 2002 | 14 | 13 | 10 | 12 | 49 |
| 2003 | 9 | 3 | 9 | 4 | 25 |
| 2004 | 10 | 2 | 7 | 11 | 30 |
| 2005 | 12 | 7 | 8 | 11 | 38 |
| 2006 | 6 | 7 | 12 | 20 | 45 |
| 2007 | 6 | 4 | 8 | 14 | 32 |
| 2008 | 11 | 7 | 10 | 12 | 40 |
| 2009 | 3 | 3 | 5 | 6 | 17 |
| 2010 | 5 | 2 | 4 | 7 | 18 |
| 2011 | 4 | 1 | 4 | 11 | 20 |
| 2012 | 7 | 9 | 8 | 19 | 43 |
| 2013 | 3 | 3 | 8 | 12 | 26 |
| 2014 | 7 | 2 | 4 | 9 | 22 |
| 2015 | 9 | 4 | 4 | 9 | 26 |
| 合計 | 129 | 75 | 113 | 163 | 480 |

【表作成：栢菅】

この時期には、合計480件の記事が確認できた。480件という数字は、前期に比べて件数が少し増えたことを意味する。しかし、4社の合計を見てみると、前期までは30件台であったのに対し、

今期は 40 件台になっており、時代を下るにつれて件数が増加する傾向が見て取れる。また、49 件ある 2002 年に目を向けると、第 50 回尾高賞受賞および尾高賞受賞作品の演奏会に関する記事(8 件)や、武生国際音楽祭 2002 に関する記事(5 件)が、この年に件数が増えた要因となっていると考えられるだろう。

この時期は、武生国際音楽祭に加えて賞の授与やオペラの批評などに関するものが多く見られたが、その中でも特筆すべきは、細川のことを「武満を超えた」と評価している記事だろう。それは、2005 年 9 月 16 日付の『毎日新聞』(大阪夕刊)で「クラシック：作曲家・細川俊夫、世界のホソカワに『循環する海』ザルツブルクで絶賛」というタイトルの記事である。この記事は、『循環する海』が世界初演されたことに関するものである。記事の執筆者である毎日新聞記者の奥田昭則(1949～)は、細川について次のように記している。

細川は 01 年、ベルリンの芸術アカデミー会員にも選ばれ、日本人作曲家として武満徹の後継者トップに躍り出たと見られたが、今回の成功で「武満を超えた」ともいわれる。

(中略)細川は 10 月 23 日、50 歳になる。オペラ第 2 作の「班女」(原作・三島由紀夫「近代能楽集」)が今夏の北独シュレスウィヒ・ホルシュタイン音楽祭でも再演されるなど、売れっ子オペラ作家として新作注文が殺到。滞欧生活約 30 年で“世界のホソカワ”の輝きを強めている(奥田 2005: 6)。

ここでは海外における細川の活動に鑑みて、細川のことを「武満徹の後継者のトップ」(2001)、「武満を超えた」、「世界のホソカワ」(2005)と見なしている。

4. 結び

ここまで、初期から 2015 年までの朝日・毎日・読売・オンステージ新聞における細川の評価の変遷を見てきた。今回のデータ分析で、細川に関する記事は 1979 年から存在し、各時代が下るにつれて記事件数が増えていき、初期は一桁であった件数も 2000 年代～2015 年には 40 件台にまでなったことを提示した。一方、今回の新聞記事分析では、1979 年に細川の名前が記事に初めて掲載され、1981 年には初の演奏会批評が、そして 1988 年には細川を特集した記事が掲載されたことが確認された。そして、1980 年代前半において、海外での細川の活動が日本に伝えられ、1997 年にはその年の細川の活動が「ポスト武満徹の一人」という評価へと結びつき、そして 2000 年代には海外での細川の活動を受けて、「武満徹の後継者」(2001)、「武満を超えた」、「世界のホソカワ」(2005)という評価も生まれるのである。日本では、細川がドイツやドイツ語圏で認められた結果を受けて、細川を評価する傾向が見られたが、「世界のホソカワ」の評価は、まずはドイツで認められ、それが日本に逆輸入されるかたちで出来上がっていくと言えるだろう。

■引用文献・参考文献■

- ・秋山邦晴 1979「現代音楽の状況 沈滞気味の無風状態を脱皮 聴衆との生きた結びつきを」『読売新聞』1979年4月21日 夕刊：6。
- ・石田一志 1988「『母胎空間』の展開～細川 俊夫～創作界のニュー・ウェーブ (33)」『オンステージ新聞』1988年2月26日 第825号：3。
- ・奥田昭則 2005「クラシック：作曲家・細川俊夫、世界のホソカワに『循環する海』ザルツブルクで絶賛」『毎日新聞 大阪版』2005年9月16日 夕刊：6。
- ・栢菅有香 2016『細川俊夫の創作、活動と批評——日本とドイツからの考察』武蔵野音楽大学大学院平成28年度博士論文（音楽学）。
- ・佐々木三重子 1997「[97回顧・クラシック] オペラに好企画、歌唱力も向上」『読売新聞』1997年12月15日 夕刊：6。
- ・ショット・ミュージック株式会社 <http://www.schottjapan.com/company/> (2017年11月15日閲覧)。
- ・白石美雪 2014「1960年代の3大新聞にみるジョン・ケージ——記事目録と分析」国立音楽大学大学院編『音楽研究 大学院研究年報』第26輯：17-32。
- ・塚田れい子 1981「ベルリン芸大 弦楽四重奏団 エネルギッシュな演奏」『週刊オンステージ新聞』1981年4月17日 第502号：1。
- ・細川俊夫 1990「『東京一九八五』の創作にあたって」『日本音楽叢書 二 伶楽』東京：音楽之友社 162-172。
- ・無署名 1979「アコーディオン一五〇年祭 期待の新人 御喜美江デビュー」『週刊オンステージ新聞』1979年3月23日 第402号：1。
- ・無署名 1980「細川俊夫の曲 ローマで一位 音楽賞（コンクール・コンテスト）」『朝日新聞』1980年12月15日 夕刊：1。
- ・Schäfer, Thomas 1997 'Biennale: Porträt-Konzert mit Toshio Hosokawa: Summt leise in die Flöte' "Berliner Zeitung" 13. März. 1997.
<http://www.berlinerzeitung.de/biennaleportraetkonzertmittoshiohosokawasummtleiseindiefloete16425368> (2018年2月25日閲覧)。

Changes in the evaluation of Toshio Hosokawa's works observed in Japanese newspaper articles

Yuka KAYASUGA

Toshio Hosokawa (1955–) is a composer mainly active in Japan and Germany, and is known for expressing the world of Japanese aesthetics, using the German avant-garde music language. It goes without saying that Hosokawa has established an unshakable status as a composer in recent years, as his work continues to be commissioned by the Salzburg Festival, the Berlin Philharmonic Orchestra and others. In addition, Hosokawa has also been active as music director of Akiyoshidai International Contemporary Music Seminar and Festival in Yamaguchi (1990–98) and fellow of Wissenschaftskolleg zu Berlin (2006–2011 season). In Japan, there are only a few previous studies on such creative activities of Hosokawa, but, on the other hand, magazine articles and newspaper articles abound enormously.

Utilizing the articles published in three of the major domestic newspapers, "Asahi Shimbun", "Mainichi Newspaper" and "Yomiuri Shimbun", and in "The Performing Arts Journal", a comprehensive specialty paper on music, dance, theater and video, this research aims to clarify how Hosokawa's creative activities are being discussed there. Articles of the above three newspapers were collected by way of online database, and those of "The Performing Arts Journal" were collected from printed publications, online database of the latter being unavailable. The articles amount to 793, dating from 1978, when Hosokawa's debut composition *Winter Bird*, for violin, was written and premiered, through 2015.

Articles on Hosokawa were found to originate in 1979. Special articles on Hosokawa were issued from the latter half of the 1980s through the former half of the 1990s. The evaluation of Hosokawa was established in the latter half of the 1990s. It has been shown that such phrases as "a composer of post-Toru Takemitsu era" (1997), "heir to Toru Takemitsu" (2001), and "Hosokawa of the world" (2005) tend to appear in the evaluation of Hosokawa's works. It can be said that these acclaims were first recognized in Germany and then were reimported to Japan and were established there.

栢菅有香

細川俊夫（1955～）は、日本とドイツを中心に活動している作曲家であり、ドイツの前衛音楽の語法を用いて、日本の美学の世界を表現する作風で知られている。近年、その作品が、ザルツブルク音楽祭や、ベルリン・フィルハーモニー管弦楽団などから委嘱を受け続けていることから、細川が作曲家として不動の地位を築いていることは、言うまでもない。その他に細川は、秋吉台国際20世紀音楽セミナー&フェスティバルの音楽監督（1990～98）や、ベルリン高等研究所（2006～2011シーズン）におけるフェロー等の活動も行っている。日本では、細川のこのような創作活動に関する先行研究はわずかしかないが、雑誌記事や新聞記事は、膨大に存在している。

そこで本研究では、全国新聞のうち、発行部数の多い『朝日新聞』『毎日新聞』『読売新聞』の3大新聞および、音楽・舞踊・演劇・映像の総合専門紙である『週刊オンステージ新聞』に掲載された細川に関する記事を対象に、細川の創作活動がどのように論じられているのかを明らかにすることを目的とした。3大新聞はデータベース、そしてデータベース化されていない『週刊オンステージ新聞』は手作業で記事を収集した。対象となる期間は、細川の処女作ヴァイオリンのための《ウィンター・バード》が作曲され、初演された1978年から2015年までである。その結果、合計793件の記事が確認できた。

これらの記事を分析した結果、細川に関する記事は1979年から確認された。そして、1980年代後半～1990年代前半には特集が組まれ、1990年代後半になると、細川の評価が定まっていた。細川の評価は、「ポスト武満徹の一人」（1997）、「武満徹の後継者」（2001）、「世界のホソカワ」（2005）などの語でなされる傾向にあることを示した。これらは、まずはドイツで認められ、それが日本に逆輸入されるかたちで出来上がっていた。